

日本現代文
全集
42

小川未明・田村俊子・水上瀧太郎集

日本現代文學全集 42

小川未明

田村俊子集

水上瀧太郎

講談社

日本現代文學全集

42

小川未明・田村俊子・水上瀧太郎集

編 集

伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



初版 第1刷

昭和41年12月19日

増補改訂版 第1刷

昭和55年5月26日

¥2700

著 者 小 川 未 明
田 村 俊 子
水 上 瀧 太 郎

發 行 者 野 間 省 一

發 行 所 株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽 2-12-21

郵 便 番 號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振 替 東 京 8-3930

裝 幀 濱 江 征 治

印 刷 信 每 書 籍 印 刷 株 式 會 社
製 本 黒 柳 製 本 株 式 會 社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたしません
Printed in Japan

0395-106428-2253 (1)

(文1)

小川未明集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

霰に雲……………	セ
薔薇と巫女……………	二〇
物言はぬ顔……………	二三
戦争……………	二六
河の上の太陽……………	三〇
空中の藝當……………	三六
砂糖より甘い煙草……………	三八

火を點ず……………	三九
堤防を突破する浪……………	六九
金の輪……………	一〇八
赤いろうそくと人魚……………	一〇九
野ばら……………	一二五
余も又 Sornambulist である……………	一二七
民衆藝術の精神……………	一二九
我が感想……………	一三三
プロレタリアの正義・藝術……………	一三三
死の凝視によつて私の生は跳躍す……………	一三五
社會藝術の基點……………	一三七
今後を童話作家に……………	一三九

少年主人公の文學……………	二五
---------------	----

詩……………	二三
--------	----

作品解説……………	瀬沼茂樹 四二
-----------	---------

小川未明入門……………	紅野敏郎 四七
-------------	---------

年譜……………	四五
---------	----

参考文献……………	四四
-----------	----

田村俊子集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

田村俊子入門……………紅野敏郎 四二〇
年 譜…………… 四三

参考文献…………… 四四五

あきらめ…………… 二五

誓 言…………… 二〇四

木乃伊の口紅…………… 二四

女作者…………… 二四一

炮烙の刑…………… 二四五

作品解説……………瀬沼茂樹 二二三

水上瀧太郎集 目次

巻頭寫眞

筆 蹟

山の手の子……………二七三

鳩……………二八三

大阪の宿……………二九三

貝殻追放 抄

はしがき……………三八五

新聞記者を憎むの記……………三九五

はじめて泉鏡花先生に見ゆるの記……………三九三

紅蓮洞……………三九七

親馬鹿の記……………四〇四

草を踏む……………四〇九

作品解説……………瀨沼茂樹 四二五

水上瀧太郎入門……………紅野敏郎 四三三

年 譜……………四三七

参考文献……………四四六

小川未明集

胡蝶の本に
サキの日の
夢あり
未明

霰に霽

今朝がたから降りしきる雪は小止みなく、北風に煽られて颯と障子窓に吹き付ける音がする。今より十餘年以前の、頃は十一月のある日の午後、私が十三歳の折、村立小學校に學んでゐた時のことである。只今、體操の課業が終つて、残る二時間、唱歌と算術の授業が終れば降校の太鼓が鳴つて、各々が家に歸ることが出来るので、歸つてからなんの遊びをしようと考えてゐた者も多かつたであらう。今でも小學校時代の者には喜ばるる遊びの一つであるが、その頃殊に流行したのは銀杏の實をもてあそんで、互に彈き合つて勝負事をした。そして紅、黄、紫、白、種々に彩色つた銀杏の實を澤山袋に入れて來て學校で、その粒數の多いのを榮譽としたのである。

だからこんなに寒い日には姉や妹のあるものは、勿論學校から歸れば炬燵の上で、菓子や蜜柑などを賭けて、この遊び事をするのが、なにより一番楽しかつたに相違ない。私は姉妹がないから、遊びに對する趣味も自然と餘の多くの子供とは異つてゐた。私は机の上に土人形の天神様を飾つて、そのまはりに繪紙だの物珍しいと思つた品物はなんでも集めて置いて、毎日毎日置き換へたり、貼り換へたりするのがなによりの楽しみであつた。學校から歸つて來ればすぐさまその前に坐つて、果物やお菓子かが必ず供へられてゐるのを食べる。そしてその前で書物も讀めば、算術もしたのである。

騒々しい控場の中には、烟れるやうに塵埃が漂うて、鬼事やら

毬遊びやらで轟々してゐる。私はベンチに腰をかけて、つらつらと歸つてからの楽しみを心に畫いてゐた。——今日伯母さんが家へ來ると言つてたが、なにを私に持つて來たか？ 私の歸る時分には、もう居ないのでないか知らん。——早く歸りたいもんだな。きつと歸つたら私の天神様の前に大好きな物があるに相違ない。——伯母さんの持つて來たのはなんだらう。お菓子なんかつまらない。先達言つてゐた鐵砲ならば好いが。——うんきつと鐵砲だ、大丈夫鐵砲——鐵砲であればいいがな。

この時拍子木が鳴つて、皆々整列をし、步調をそろへて、唱歌室に入り込んだ。私はなほ繰返し繰返し、「早く家へ歸つて見たいもんだな。」と心の中に思つてゐる。一同が腰掛に着いてから、扉が開いて、優容に入つて來られたのは村里先生である。

級長が「禮！」と言ふ號令を合圖に生徒が一同起つてお辭儀をして舊の座に就くと、妙なる音樂の響が洋々たる海原の中からでも湧き出たやうに、ほの暗い四壁に漂つてオルガンが鳴り始めた。

村里先生といふのは、二十五六歳の女教師で、瘦形の眸の涼しい、口許のしまつたそして額際に掩ひ被さるほどの黒髪を夜會に結んで、耳朶の邊に溢るるほつれ髪に厭らしい油の香はないけれど、高潔な眞白なりponはさながら緑色の春野に飛んでゐる胡蝶の姿に似てゐる。私はどういふものか心の底から村里先生が慕はしくつて、折々夢にさへその面影を見たことがある。

しかし先生に向つては、ろくろく話をしたことがないばかりでなく、亦先生に顔を見られるのが羞かしいので唱歌を教はる時にも一番前の列に坐つたこともなければ、ただ人知れず胸のうちに先生を慕はしく、戀しく、なつかしく思つてゐたばかりである。

先生の歌の聲はなんたる美しい聲であるかと思つた。ああこんな美しい聲で草花の匂はしく咲いてゐる野原で、ただひとり麗かな春の日に、先生がオルガンを弾いてゐなかつたならば、天女がきつと降りて來て、先生を翼に載せて、雲雀の鳴いてゐる雲の上へ舞ひ上

つて、あの緑色の大空に隠してしまふだらう。そして草の葉に吹く夕暮の風はさびしく、しづかなく花瓣が白う散つて、蜜蜂も巢に歸る頃になつても先生は決して歸つて來なされず、その時私の思ひは悲しく悲しく天女の行方に憬れて、廣野の中に佇んで、夕焼空を眺めてゐたならば、必ず遠い遠い西方の天上から風のまにまに音楽の調べが聞えて來るでもあらうと思つた。

風は聲高く叫んで、雪は蕭々として地上に積る様子、校舎の障子窓は夜の暗くある。

私はこの時ほどこの歌の意を悲壯に感じたことはない。村里先生の優しい節につれて、生徒は一齊に歌ひ出した。私はしばらく黙して熱涙のさんさんと湧き出るを覺えて、悲哀に且つ勇壯に感ぜざるを得なかつた。

雪は紛々として朔風に連れ合つて降りしきつてゐる。洋々たる海原から湧き出るやうな雄大な樂の音色に調子を合せて、或は高く、或は低く生徒の歌ふ勇壯の聲は、校舎の四壁を振つてしばらく天地の寒氣を震動せしめた。私は蒼茫たる海波の寄せては返し、返しては又寄せる孤島の様を想像して、その行末のいかにも希望あるが如く、又いかに物寂しい氣持をひき起した。

「三千餘萬兄弟共よ、守りに守れ君が代を、劍に代はる大砲の響、向へる敵を打ち拂ひ。」

三千餘萬兄弟共よ——私は日本の國に住んでゐるものはみな兄弟であるのをきいて、今更誰でも彼でも一層親しく思ふ。そしてこの級の者はみな兄弟であるばかりでなく、この學校のものはみな兄弟であるんだ。さう思ふと一時に氣が大變に大きくなつたやうに感じて級中を見廻すと、級中の除者になつてゐる西澤と云ふ臉の腐爛れた顔の汚らしい×××がある。私は第一番にその者に目が留つたので、この者もやはり兄弟かしらんと半ば驚いて心のうちは平かでなかつた。だが考へて見るとやはり可哀さうになつて來て、遂に兄弟といふ名目だけは許した。次に目に入つたのは生意氣な、高慢な、

嘗つて自分を苛めたことのある椿山と云ふので、これも自問自答の結果、遂に兄弟たるを許した。第三番は五十嵐と云ふ大の嘘つきであつた。この者ばかりはと躊躇つて少しく考へ込んでゐると、

「霰に雲、横ぎるとても、太平洋の波濤の中を。」と、高く一同が一齊に歌つたのに氣が奪はれて、自分も遅れじと早口にそれに合せて歌つた。

ああ、日本の國民は三千餘萬人ある、そしてそれがみんな兄弟や姉妹なんだな。さうするとやはり村里先生は私の姉さん……嬉しいな！なぜそんなら一軒の家にみな生まれなかつたのかしらん。……太平洋でや大きな眞蒼な海なんだな。そして大空暗く霰に雲が降つてゐるんだな。……ああそんな物寂しい海洋の波を横ぎつて、故郷遠く離れて幾萬里となく船に乗つて沖へ出たなら、どんなにか悲しい、勇しい心地がするだらう。

もし村里先生が勇しいと思つて、私を褒めてくださるなら、私はどんなに苦勞をしても、船に乗つて太平洋を横切つて見たいものだ。たとへ飛雪が荒れて、風浪が狂ひ、敵の軍艦から火花を散らしても、私はきつと力の續く限り、これらと闘つて、遂にそれで死んだつてかまひはしない。

折しも太鼓が響いて、唱歌の授業が終つてしまつた時、私は障子を開けて格子の内から、外の景色を茫然として眺めてゐた。灰色の空の深さは限り知られぬ如く沈鬱に見えて、朔風に碎かるる雪片、霏々として空漠の運動場に飛んで銀粉を散ずるやう。

私はつくづくと思つた。こんな日に太平洋を航海してゐる軍艦があるのかしらんと。

「太平洋を航海してゐる軍艦があるんだな。」

「太平洋！」

「ああ、太平洋！」

「眞蒼な濤の、渺茫として限りなき太平洋！」

「三千餘萬兄弟共よ……。」勇しいな。

「般にみぞれ横ぎるとても……。」悲しいな。
「太平洋！ ウン太平洋！」僕は日本男子だ。いんまに海軍兵になるんだ。

と、私はくよくよ種々なことを考へて熱心に雪の空を眺めてゐると、この間まで遊ぶことの出来た運動場の、土手にある老いたる松の木、絶巔に一羽の鳶が止まつてゐる。

遊ぶ時間にも、私が餘り沈んでゐたんだから、友達が不思議さうにして、或は問ひを發し、或は擲擲つたりしたけれど、私は乗氣になつて、遊ぶうとも思はなかつた。

次の時間が始まるので、拍子木を鳴らして、小使が廊下を傳つて来る。やがて私の耳の端でわざと激しく續けさまに鳴らした。恐らく私の茫然としてゐるのを擲擲半分に驚かさうとしたのだらう。

しかし私にはかに元氣付いて、年取つた小使の背を擲きつけた。

「痛い！」と云ふ濁聲を後に残して、ひとり大聲に「三千餘萬」を歌ひながら、廊下を驅けて教場に入つて行つた。

この刹那、

「シッ、やかましいー」

と、怒鳴られたので、恟として教場を覗くと平常から一番嫌ひな高倉と云ふ算術の教師が、いつの間にか椅子に腰掛けてゐて、もう辭儀も濟んだらしく、一同の視線はこの時悉く私の顔に集つた。顔は赫として、火の出るやうに眞紅になつて、怖る怖る席に就かうとて小走りに歩んだ。もし私の後に眼があつたなら、あの高倉教師の冷かに睨んで見送つた顔付が、どんなに怖しかつたか思ひやられる。さなきだにその時私は心の目で、ありありとその顔付が見えて、後髪のなんとなく引かれるやう、今にでも呼び止められはせぬかと思つて、辛うじて席に就くと同時に、前の席にある人の背を楯に、そつと教師の顔を覗ふと、もう私を睨んではゐなかつたので、やつと安心することが出来た。世の中によく言ふ穴の中へ入りたい

とはあんな場合に出遇つた時の氣持を云ふんだらうと思ふ。

學校課業の中で大嫌ひなのは算術である。従つて目付の三角形な高倉教師も好かない。だから高倉教師の時間になると私は厭で厭でその時間が終ると、恰かも重荷でも下ろしたやうな氣持がする。

今日はこの時間の始めに當つて、已に失策をしたから、ともすると歸りに晩留を喰はされはしないかと心のうちで怖れてゐるから、問題が出て心も他に轉じてゐてやる氣にならない。かれこれしてゐるうちに、

「石筆描いて！」

と果然命令が掛かつた。私はまだ答が出てゐない。で心がなんとなく落着かず、ひそかに問ひがかかつたらどうしようと思惑してゐるうちに、

「檜山さん、言つて御覽なさい。」

嬉しい哉。自分は虎口を免れて、すぐ隣の檜山と云ふのに問ひが掛かつた。けれども檜山は黙つて答へない。なぜ檜山はもちもぢしてゐるか、早く答へればいいのにと氣が氣でなくて、一寸石板を覗けばやはり答は出て居らんのだ。さあしまつたと思つて足ずりをする途端に、俄然として霹靂は頭上に下つた。

もう絶體絶命と觀念して、私は潔くきつと教師を見詰めて、
「出来ません！」

と言ひ放つた。教師もきつとなつて、しばらく私を見返す。流石に私の頭は自然と項垂れてしまつた。

「宜しい。貴生は今日歸つてはなりませんぞ、お残んなさい。」

この宣告の如きは私にとつて馬耳東風であつた。なんでも私は子供の時から妙な性質で、些細な事でも豫期せらるる場合には、非常に神經を勞するけれど、愈々その場合に臨むと、殆んど反對でわが身に關することさへ、さながら他人の身の上のやうに感ずるのが癖であつた。この場合もその例の一つである。大風雨が過ぎた後に草木が却つて落着くと云ふ風に、みづから餘り平氣であられるのに

怖れた位であつた。その日の算術の問題は四五題出たけれど、私はそんな問題には頓着なしに、種々な取り止めもない空想に耽り始めた。ふと机の抽出から半ば見えてゐる彩色した繪地圖の表紙が目にと留つたので、今更物珍らしさうにこの書を引き出して、綿密に注意を向けて、やがてこれをも空想の材としたのである。猛々しい牡獅子が眞紅に咲き亂れてゐる牡丹花の蔭から躍り出して、小毬位の大さの地球儀をもてあそんでゐる繪を下にして、上方には風景畫が描き出されてゐる。その區劃をするに赤色の帶を以てして、それに黒文字で「大日本地圖」と書かれてあつた。

私は眸を風景畫の上に移して、つくづくと覗き込んで、この興味ある畫趣に對して、恍惚たらざるを得なかつた。渺茫たる海原の青波は靜かであつて、白鷗が颯々として二三羽飛んでゐる。沖を遙かに黒烟の行く船の影が見えて、白波を舳艫に揚げつつ、天氣穩かな好日和、どここの國の風景であるか。幹高き橄欖樹の葉蔭、翠色濃やかに繁つて、西洋造りの三階の建物が海濱に巍然として聳え、輕やかに白雲が二筋、三筋漫々たる橙色の天空に浮んでゐる。

嘗て某先生が地理の時間に伊太利の國はいつも空の色が澄み渡つてゐて、草花が野に満ち満ちて、風薫り禽鳥は梢に囀つて、それはそれは美しい景色であるとおつしやつた。その時に私は先生に向つて、

「水の綺麗な池なんぞも澤山ありますか。」

と問ふと、先生は少し考へて、

「それはありません。夏の晩景などに舟遊びするには適してゐようと思ひます。」

と答へなざる。さうすると誰であつたか、ただちに、

「先生は行つて御覽なすつて？」

問ひ返すと、先生は頭を左右に振つて、大聲にお笑ひなさつたとがあつたが、今この景色を見てもしや伊太利の風景でないかと考へると、なんとなく懐かしい氣持になる。

ああ、この海は太平洋でないかしらん。そして私が伊太利に十年も、二十年も行つて居て、今この船に乗つて故郷へ歸るんだつたら、どんなに哀しく、又嬉しく感ずるか。或は一生伊太利の國に、止まつて歸りたくないかも知れない。さう思ふと益々悲しくなつて來て、村里先生の面影とこの景色となにか關係する如く、ただもうなんとなく泣きたくなつて來て泣かれず、なにがな悲しいというて、とりとめた悲しいものもなく、なにか心の中で渴仰すれど自分でさへその欲するものの、形を明瞭に認むることが出来ない。

村里先生の面影を思へば、この景色が心頭に離れ難くなつて來る。この景色を哀れに感ずれば、村里先生の面影が戀しくなつて來る。私はただ焦つたくなつて來て、石筆を力任せに握つて、石板の面に縱横無盡に直線を描き始めた。やがて太鼓が鳴つて、空想の中に算術の時間は濟んで、生徒一同は歸る仕度を整へて家路に急いだ。ただひとり私が教場に殘されたばかり。

私は心のうちで、高倉教師を怨めしく思つて、今か今かと教員室から教師の出で來るのを待ち設けてゐたけれど來る様子は更に見えない。二階では小使が掃除をする物音がいつしか消えて、時計は三時を報じた。冬の日の短いに、日暮の近づくのが心配でならんので、漸々心細くなつて來る。

「もう伯母さんは歸つちまつた？」

折角伯母さんに逢へようと願つてゐたのに、高倉教師の爲で、その願が水泡に歸したのが恨めしく、忌々しく、もし先が教師でなかつたなら、品行點に關係して、退校を命ぜらるることがなかつたら、私は高倉教師に跳り懸つて、噛み付いて噛み付いて、思ふ存分の目に遭はして遣りたいと思つた。

一時非常に熱した私の感情は次第に冷却して、四邊の寒氣が身に浸みて、廣い校舎の靜まりかへつて吹雪の音のみ障子を鳴らす度に、増す哀しさが胸を刺すやうに覺える。

忽ち入口の扉が開いたから、教師だなどと思ひ、少しためらつてそ

つちを見ると、手拭で頬^ほを拭き、手に箒^{ほうき}と塵取りを持つてゐる小使である。私は黙つて俯向くとそのまま聲も掛けずに扉の閉ぢる音がして去つてしまふ。定めし誰も居らんと思つて入つて來たのだらう。そして私がゐるもんだから掃除をしないで行つたに相違ない。なぜ平常のやうに話を仕掛けてくれんのか。そして極めてその様子の冷淡に見えたのも、晩留^{ばんりゅう}になつたので、信用を落したのではあるまいか。……して少しのことで、人を晩留にする高倉教師は無慈悲であるばかりでなく、一體私を憎んでゐるからだ。……

首を擡げて、黒板を見上げると、まだ消え残つてゐる數字の書振りが、いかにも高倉教師の性質そのものに似てゐる。温か味もなく、冷酷に角張つて見悪い恰好をしてゐる。

それから餘り徒然^{つれづれ}であるから、破れ障子の穴目を數へると十三あつた。

この時運動場の松の樹で、烏の啼聲がきこえる。

私は早く家へ歸りたくてたまらない。

はや薄暗くなつてくるのでないかと、室内を見廻すと、机が幾列となく並んでゐて、人影は見えないけれど、二時間前まで笑ひ合つたり、話し合つたりしてゐた友達^{ともだち}の姿がなほありありとしてゐる。

待つても待つても、教師が來ないので、逃げて歸らうかと再三思つて見たが、流石にそれを敢へて犯す程の勇氣がないので、苦しまぎれに感情が昂じて來て、ひとり拳を固めて面前に高倉教師があるが如く空中を二三度目懸けて撃ち、あまつさへ幻影を目當に胸の邊を激しく突き破つた。

再び扉の開く音がして、今度入つて來たものは間違ひなく高倉教師である。

ただちに高倉教師は私の機の傍に立つて、懇々として説諭するのである。思ひきやその言の柔しき、私は殆んど感涙に咽^{なみだ}ばんとした。しかし思ひ返して見ると眞に私を可愛がつて呉れるものなら、なぜ二時間も私を晩留にしたのだらう。矛盾してゐるぢやないか。

さう一途に思ひ詰めると、却つて高倉教師の面付が憎くなつてきて、擲^なつて擲^なつて擲^なりぬいてやりたいと思つた。ああ、しかし教師だと思ふと意氣込^{いきこ}みがつかりしてしまふ。

家ではおつ母さんがどんなに待つてゐなさるだらう。天神様になが上つてゐるかしらん。——鐵砲——ウン鐵砲！ 早く歸つたら伯母さんがあなされたらうに……早く歸りたいな！——と思ひ出すと一刻も早く飛んでわが家へ歸りたくなつた。教師の説諭なんか耳に少しも入らぬ。早く終ればいいと思つても、なかなか終りさうもない。早く歸りたいので氣が氣でなく、足も下に落着かず、心も胸に定まらず、じれつたいのを齒齧^はみをしてぢつと堪へてゐると、教師は言々句々味ひきつた調子で、徐々として且つ懇々として諭すが如く、嚇^{おそ}すが如く、時に嘲けるが如く、色々なことを言つてゐる。私は丁度人形でも、機械的に、ひとり饒舌^{しゃべり}をしてゐるやうな氣持であつて、頗る冷靜に彼の態度を批評せんと試みる如く、先づ顔付を一瞥して、それから胸の邊から、漸々帶の邊まで見下ろした。最後に時計の紐やら、結んであつた磁石の形やらを仔細に檢覈して、再び磁石の針に思ひを寄せて、どうしてこの針は不變に南北を指してゐるのかと不思議に堪へなかつた。……そして北極は幾萬里あつて、南の端はどここの國だらうなども、益なき考へを廻らした。

教師は折々際立つて、聲を強めて、

「え、能く分りましたか。」

と注意せられて、ハテナにを教師は言つたのかしらんと自から答に惑ふのであつたが、無言にゐる譯に行かず

「ハイ、分りました。」

と、溫順しく、二三度も同じ風に、その問ひに答へたであらう。

最後に教師は更に聲を少し低めて、弛い調子で、

「ぢや今日はそれでお歸りなさい。」

と宣言を渡した。私は飛び立つやうに嬉しくて、下駄置場で下駄を取るのも遅しと戸外に飛び出した。生徒が歸つてからかれこれ二

時間餘も経つたことであれば、雪が白く降り積つて、なんらの下駄跡も見えない。ただ真白な雪の上を踏んで、ひとり物寂しげに、校門の外へ出ると、新なる足跡が二の字なりに、玄關から出て、我より先に行手に印せられてあつた。

雪は今しがたから、降りやんで、夕暮の空色明るく、松の樹の頂には青色の所も現はれて、ちぎれちぎれに漂ふ雲は岩根を掠めて、汀に寄せ来る波の氣はひ。

街路へ出ると錯雑してゐる多數の下駄の跡にまぎれて、校舎から出た二の字形の足跡は、探ね出すことが困難であつた。樹々の梢に重なる白雪は真綿でも打懸けた如く、なかなか風情あるばかりでなく、石置屋根の石の頂が點々として黒豆の餅を見るやう。で私は直ちに連想した。ああ年の暮の餅搗きの季節が、漸く近づいたと。……折しも空高く鳥が啼かずに一羽飛んで行く。……また窓の内から鳥を呼んで餅片を投げてやらう。やがて橋の袂へ来ると、かなたにお高祖頭巾を被つて、灰色の上衣を着て行きかかる女姿を見た。まがひもなく私の慕はしく思つてゐる村里先生の後姿である。

自分より一步前に學校を出たのは、村里先生であることが知られた。……先生は私の晩留になつたことを知つてゐるかしらん。——高倉教師はなにか村里先生に私のことを言ひはしまい。……私は種種なことを氣にして、心配で心配でならなかつた。私は男であるから足が早い。先生は足が遅い。私は追付くまいと思つても、自然追付くやうになつてしまふ。しかし平常でさへ先生に顔を合すのがなんとなくきまりがわるいの、しかも晩留になつたと覺られてはなほさら面目なく思ふのだ。——それでも先生が私は晩留になつたのでなくて、どこか友達の許へでも、遊びに行つて遅く歸るのだと思つてくださればよいが。なんでも私の良心が承認せんで、大膽にも先生を通り越して、前に行く元氣は出ない。——早く家へは歸りたいし。……

で、私は大地を見詰めながら無心に先生の行つた下駄の跡を、多

く入り亂れてゐる足跡のうちで、これであらう、あれであらうと吟味して、覺束なげに、探ね出しては、その足跡を拾つて徐々として、後から歩んだ。

橋を渡つてから一二町して、先生の姿は、いつしか南の横町を曲つて見えなくなつてしまふ。この時私は大急ぎに踏み出して、先生の曲つた横町の角に佇み、先生の行つた方をきつと見送つたけれど、はや姿はどこへか隠れて認めることが出来なかつた。で私は茫然としてしばらく、その方に向つて佇んでゐると、ある人の陰になつて遙かに、それらしい頭巾姿の戀しい影が見えたが、又消えてしまつた。

市街へ出てから、私はただ家の方へと歩みを急いだ。大空は漸々と青澄んで、色合がなんとも言はれん、佳い氣持を惹き起して、私は俄かに生れ變つたやうに、今までの鬱いであたのと丸反對に、なんとも爽快で堪らなくなる。その氣持と言つたら、ちやうどあの淡藍色の空のやうに、あつさりとして、頭のうちも身體も、どことなしに軽くなつた。

私の経験したうちで、運動した後の氣持と、入浴した後の氣持の快いのがなにより自然に近い、この世を離れて全く自分一人の、出ず入らずの純潔な愉快であると思ふが、それに増して、快い氣持を惹き起した。——樂天でもなければ厭世でもない。——また無我であつて有我的やうな。——酔うてゐて醒めてゐる。なんでもあの淡泊な薄藍色の空色そのもののやうな感じがする。

この瞬間の自然美に融合した私の心頭には、伯母さんもなければ、鐵砲もなければ、村里先生もなければ、高倉教師もない。ただ苦悶の薄闇から脱け出して、清明なる光明界に來た新參者である。

洋物店の看板になつてゐる、高層の時計臺に冬の夕陽が雲間を洩れて、硝灼と硝子板に力なげに、反射してゐるのを見ると嬉しく、既に心は飛び立つばかり。時計の長針は南方を指して、短針は斜め

に青澄んだ天上界を指示してゐる。

「青い海！」

「青い空！」

「そして、あの太平洋！」

私も青い空のかなたへ奥深く行つてしまひたい。若やかな希望！あてなき渴仰！形なき故郷と云ふ觀念は、私の十二歳の時に既にあつたのだ。

夢の世界を歩んでゐる氣持で、町も、人も、路も、雪も、自分も悉く大氣のうちに融合してしまつて、無差別の心地。時計臺の前を去つて歩み出してからは、再び杳然として心頭に喜びなく、悲しみなく、愁なく、怒なく、我も亦無にして未だ全くの無我ではない。

うなだれた首を擡げて左側を見ると、ふと目に止つたものは、いたく私の平和を害した。それは赤地の看板に胡粉で、「しら髪染あり」と書かれた、丈短き看板であつた。不快！不快！言ふに言はれぬ不快！！ああ、やはり浮世である。と一種の悲しみが浸々と我が頭を刺戟して、いつか心の鏡は曇り、今まですがすがしてゐた頭がまた重くるしくなり始めて、殺氣を帯びた破壊の焰が、むらむらと胸の中を往來するので、睨がびりびりと吊るのを覺えた。しかしわが家の生垣が見えると、全然と心の不平は風いだが、それと同時に恐怖心が萌して、自分の晩留になつたことに考が及ぶと、わが家ながら元氣よく入りにくい。この時再び血潮が燃えて高倉教師の仕打を忌々しく思ふ。

先づ玄關の踏石を見ると下駄が一足もなかつた。ああ伯母さんは來てゐないのか……少ししよげ氣味になつて、

「只今歸りました！」と言ふと、奥からお婆さんの聲で「アイよ。」とおつしやつた。ハテお母さんはどうしたかと片手に辨當をぶら下げたまま、いきなり襖を開けてはいるとお母さんは留守の様子、お婆さんは洋燈の下で、ひとり寂しさうに縫物をしてゐなされた。その傍に膳がちゃんと私の爲に据ゑられてある。

お婆さんは入つて來る私の顔を眼鏡越しに睨むやうに御覽なさつた、しかしほほ笑んでゐなされた。

「お前はまた晩留にせられましたね。」

私はさう言はれたのが口惜しくつて、少し自棄氣味になつて罵つた。

「晩留になんか誰がなるものか。お友達のとこで遊んで來たんだよ。」

と、遂に心にもない嘘を言つてしまつた。流石に良心が責めて、常ならず胸の鼓動は高い。

お婆さんは縫ひ返し縫ひ返し黙つて微笑んでゐなされた。で、私はお婆さんに心のうちを見透されたかと思つて、妙にきまりが悪く、なんとしても心持が不安で堪らない。

「お婆さん、どこか泣いた跡があつて？」と言ふと、お婆さんは賢しとすぐさま、その言葉尻を捕へて、

「そら御覽なさい、晩留になつた癖になぜ嘘などお言ひだ。お友達のとこへ遊びに行くなら斷つてお出でなさいよ。大層心配しますからねえ。」

もうこれで事済んだといふので、私の元氣は恢復する。一體お婆さんは、ちつとも怖くはないんだから、圖に乗つて口答すると、初めのお婆さんもお婆さんも一生懸命で鋒芒を向けなされるが、遂には根氣負けして黙つてしまひなされる。そしていつも私が結局の勝利を得るのだ。

「お母さんは？……」

「餘りお前が穩しくないからどこかへ行つてしまひました。」

私はもしや眞實かと思つて、氣が氣でない。

「どこへ行つたの？」

「さあ、どこですか、私も知りませんねえ。」

「嘘だい、お婆さんは知つてるんだから教へて下さいよ、よ。」
「ねえ、教へて頂戴つてば！」と疊を踏み鳴らして、切に聞かうと

お婆さんの肩を揺つてねだると、遂にお婆さんは言つてしまひなされた。

「伯母さんから迎ひが来て——ちきに歸つて来るんだから。さ早く御飯を食べなさい。」

私はやつと安堵して、天神様の前へ行つて、革靴を肩から下してそこへ投出し、なにが上つてゐるかと見ると、果して紙に包んで菓子供へてある。私は菓子を食べてから再びお婆さんの側で夕飯を食へて、愈々机に向つて今日の復習に差し掛ると、算術の課業はなにをして來たのか狐に化かされたやう、なにを考へても得られざること夢を捉へるやうだ。三千餘萬の唱歌だけは忘れるどころか、その當時の空想の跡まで、歴々として頭腦に浮んで来る。

お母さんを待つてゐるうちに、眠氣がさして來て、お婆さんに床を延べて寝かしてもらつた。まだ熟睡に入らないで、うつらうつらしてゐると、威勢よく走つて來た一輛の人車が門前にガタリと止る。……「お歸り——」と云ふ聲が聞えた。私はなんでも遠い處から人達の話聲がして、お婆さんも出迎へなされたと思つた。

私も兩足で三度眠てゐて蒲團を蹴上げながら、口のうちに「お母さんお歸り——」と言つて出迎へた心持、心が落着かんで、足は浮いてゐるやうで、定めし魂だけは出迎へに抜け出たのであらう。

……しばらくたつてから、我が門口を覗き込んでゐた青鬼が、大地に鐵棒を曳き摺りながら寒夜に通り過ぎて行くやうに、がらがらと轍の響は、再び暗に幽かに消えてしまつた。

又熟睡に入らうとする刹那、お母さんの話聲が近く、枕元に聞えて、私の魂は居所に落着かれず、再び夢と幻の境に迷ひ出した。

優しいお母さんの聲で、

「坊や。もう休んでしまつたの。今お母さんは歸つて來たんだよ。」

私は心のうちで、

「お母さんお歸り！」

と重ねて言つた。しかしお母さんの耳に聞えよう筈がない。

「まあ、よく眠つてゐるんですね。」

と、お婆さんに向つてお言ひなされた様子。その後で二人はなにやらお話をなさる。私は勉めて言に上した。僅かに、

「お母さん——」

と、ただそれつきり。

「お坊や目が醒めたか。今度の日曜日にはね、伯母さんが美しいやんを連れて遊びに來るつてさ。そしてその時に持つて來るつて、お約束の可愛らしい鐵砲が買つてあるんだよ。」

それを聞くと、私は大望成就したので安心して、深い深い眠の幽谷に遊んでしまふ。私はその夜實に恐ろしい夢を見た。それは試験場で算術に苦しめられてゐるので、黒板に掲げられた四問題の内、まだ一題として満足に出來上つたものはない。第一鐘が鳴ると、生徒の一人が答案を差出して扉を開けて出たかと思へば、續いて一人又二人、その度に扉のギョツと鳴るのが氣になつて、苦しいほど自分を促すので、追々退場して残りの人数は僅に五六人になつてしまつた。(二度落第したといふ小池、よく晩留になる大橋と水野、池澤、佐藤いづれも學校の成績は丙である。それと自分で都合大人)氣は益々苛立つばかり。石筆持つてゐる指頭は戦々、靜かに考へる態度さへ失してしまつた。そして例の意地悪な高倉教師は片手に鞭を握つてさも私の出來ないのを蔑視む如く、私の机の傍に立つて、

——さながら晩留になつたときにした態度で——私の一舉一動に注目してゐる。だから私は益々筆が動かなくなる。そして自暴自棄の鹽梅で斷念して答案紙を寸々に引裂くと折しも、第二鐘が鳴つて時問が來た。高倉教師はさも得々たる如く手柄顔をして、冷々たる笑を浮べながら、味ひきつて言うた。

「あなたは見事に落第しました。いや感心のことです。」

嗚呼、この人を馬鹿にしきつた宣言！ 私は居堪らず癪癪まぎれに泣き聲を絞つて罵る。

「もうこんな學校へ誰が來るもんか。誰がこんな學校へ死んだつて